

Strix 9: 221-224 (1990)

## 巣箱によるカワガラスの繁殖

川本美千夫<sup>1</sup>・小林繁樹<sup>2</sup>

### はじめに

樹洞営巣性の鳥が巣箱を利用することは、小池・樋口 (1989) によりよく知られているが、カワガラスの巣箱利用については、今まで藤井 (1985) が報告しているだけである。今回筆者らは、カワガラスの巣箱利用を山口県都濃郡の桶山橋で確認し、観察したので報告する。この観察報告は、確認初日より巣立ちまでの数日間と、巣箱および状況についての記録である。

### 調査地および調査方法

調査を行なった場所は、山口県内を流れる一級河川の1つの錦川の上流で、これに流れこむ支流の倉谷川にかかる桶山橋であるが、橋は山間部を流れる川にかかるものの、国道のため比較的交通量が多い。

橋の大きさは、幅8m、長さ7m、高さ3mで、川幅は5m、水量は少ない。本流錦川と橋との距離は約20mである。

巣箱は川の右岸、橋の裏側の下流側、横から3.6mの位置に架設した(図1)。架設した巣箱の形状

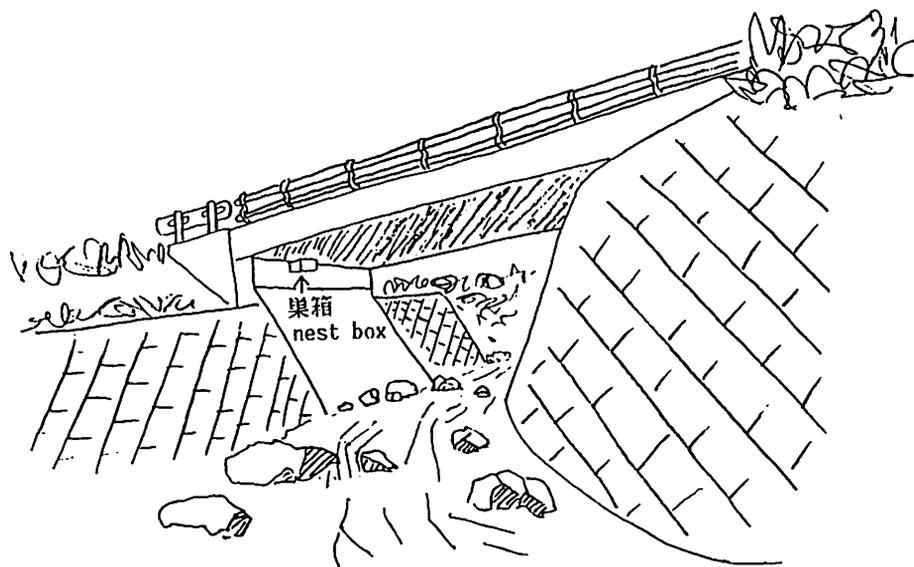


図1. 巣箱の設置状況。

Fig. 1. The location of the nest box and the surrounding environment.

1990年10月20日受理

1. 〒746 山口県新南陽市日地町2-18. B-34

2. 〒745 山口県徳山市栗屋948-24

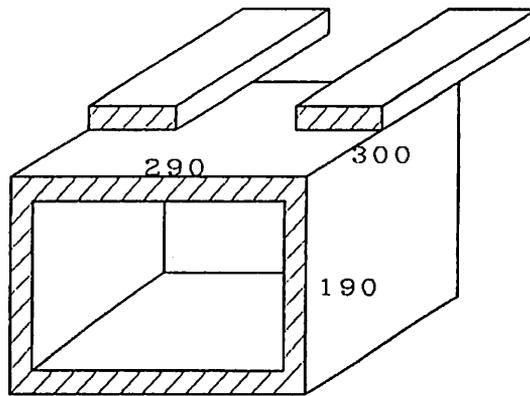


図2. 架設した巣箱の形状 (単位 mm).

Fig. 2. Size and shape of the nest box for the Dipper (size in mm).

は図2に示したもので、小林が川尻(私信)の観察記録および写真を参考に作製し、1989年11月10日と、12月16日に架設した。

巣箱のとりつけにあたっては、橋と土台の間にある隙間に、巣箱上部にとりつけた2本の固定用の木を差しこんだ。また、この橋の反対側には図2に示した巣箱より幅、奥行ともに約20mm小さいもの1個と、大きさは小さいものと変わらないが、前面下部に30mm程度の板をとりつけたもの1個を設置した。

#### 観察記録

1989年12月16日

利用状況の確認と巣箱の追加のために訪れたが、巣箱にはなんの変化もみられなかった。

1990年2月26日

再度、利用状況を確認すると、設置した3つの巣箱のうち一番大きな巣箱をカワガラスが利用していた。

巣は入口の一部を残して中にコケ類を詰めこんだ形である。この時すでに中にはヒナがいて親鳥が食物を運んでいた。

2月27日

親鳥の留守をみはからって巣箱の中を観察。中には3羽のヒナがみられ、かなり大きくなっていたので、巣立ちまであと1週間くらいと予想した。

2月28日

夕刻の観察では、ヒナへの食物運びは18時ごろに終わったようだ。

3月2日

親鳥が2羽で食物運びをしているのを確認した。それまでは親鳥が何度食物を運んでも、あるいは違った方向から飛んできて、個体差がないため何羽で行なっているのかわからなかったが、この日同時に2羽の親鳥が巣箱に入った。

3月5日

これまでの親鳥の行動をみると、それぞれの親が採食場所を分けているようだ。巣箱を境にして、1羽は上流で、もう1羽は下流とに別れて、効率のよい食物とりを行なっているらしい。

3月6日

ヒナの巣立ち日が近いのか、親鳥はくわえた食物をすぐにヒナへ与えようとせず、しばらく巣箱のまわりを飛びまわったり、食物をくわえたまま鳴くといった行動が何度もみられた。巣立ちを促しているのだろうが、ヒナは食物欲しさのため、親鳥をみるとより大きく鳴いた。

3月7日

早朝巣立ちをしたらしく、親鳥は巣箱へやってこない。耳をすますと上流と下流に分かれて時々ヒナの声が聞こえてきた。付近を探すと上流の岩陰に1羽の巣立ちヒナをみつけることができた。ヒナは警戒して逃げたが、すでにこのとき泳ぐことも潜ることもできた。ただし、上手ではなかった。

この日親鳥の1羽は、何度か巣箱に帰って巣材の一部(羽毛のようなもの)をくわえて川に捨てた。

3月10日

ヒナ2羽と親鳥は巣箱から100m離れた本流の下流側で過ごしている。

巣箱をとりはずして箱の計測および巣材の観察を行なった。巣の材料は外部を厚くコケ類でおおい、内部の産座には枯れた木の葉や細根、茎などを使用していた。

入口の形状は横15cm、縦10cmの楕円形をしており、入口付近にはたくさんのフンが付着しており、ヒナの排泄は巣の外へ向けて行なわれたものと考えられた。

観察後、内部を掃除して元の位置に巣箱を戻した。

3月14日

再度観察に訪れたが、ヒナ、親ともに確認できなかった。巣箱をのぞくと、新しいコケが内側の左右のすみに詰めてあった。この日より何日後、数度訪れたが、これ以上の変化はみられなかった。

## 考察

今回設置した3つの巣箱のうち、使用されたのは一番大きな巣箱であった。なぜほかの巣箱が使用されなかったのか考えてみると、巣箱の大きさに問題があったのではないかと考えられる。

カワガラスは、多量のコケ類を巣となる場所に運びこみ、この中で繁殖を行なうため、産座と親鳥の抱卵空間、育ていく数羽のヒナのための空間も必要となる。巣箱には、これらの巣材と空間を満たすだけの容量が求められるため、架設した巣箱のうち、いちばん大きなものが選ばれたのであろう。

しかし、今回繁殖に使用された巣箱が、カワガラス用として適当な大きさだとは思えない。巣材を引き出した時の観察では、幅は問題ないが、高さ、奥行が少なく、巣の内側に板がむき出した状態で、複数のヒナが成長するにはきゅうくつだったのではないかと感じた。大きさとしては、高さ、奥行ともに30mm以上追加したほうがよいであろう。以上のことから、今回使用された巣箱はカワガラス用としては小さいものと考えられる。

また、入口の形状について藤井(1985)は、巣箱の前面をふさぎ、出入口のみあけた形のものを報告しているので、どちらの形でも利用するというのであろうか。しかし、作製、観察、掃除などを想定すると、前面を開放したものの方がよいと考える。

現在、さまざまな形での自然破壊によって多くの鳥の生息環境がおびやかされているがカワガラスも例外ではない。ひとつの案として、これから山間部に橋をかける時には、橋の裏へ意図的に繁殖できる空間、あるいは巣箱をもうけてやっではどうだろうか。もちろん自然環境が今よりもっとよい状態で、いつまでも残るのが最善ではあろうが、

## 引用文献

藤井格. 1985. 自然の教室 カワガラス. 私達の自然 (280): 8-13.

小池重人・樋口広芳. 1989. 人工営巣場所の種類と架設効果. Strix 8: 1-34.

Breeding record of the Dipper *Cinclus pallasii* using a nest box

Michio Kawamoto<sup>1</sup> and Shigeki Kobayashi<sup>2</sup>

From February to March 1990 a pair of Dippers bred in a nest box at the Okeyama bridge in Kano-cho, Yamaguchi Prefecture. The nest box was filled with moss and dead leaves. Three young fledged from the box. This is the second record of the use of nest boxes by Dippers in Japan.

1. B-34, 2-18 Hijimachi, Shinnanyou-shi, Yamaguchi 746
2. 948-24 Kuriya, Tokuyama-shi, Yamaguchi 745